

優秀賞

二人だけの約束

長崎県 長崎県立松浦高等学校二年 久保川 愛子

おじいちゃんは持病があつて、私が小四くらいときから、入退院を何度も繰り返していた。家族や親戚と一緒に病院へ面会に行くのが日常みたいになっていった。

しだいに呼吸が苦しくなっていく、食べる量も減って、痩せていった。身体が弱っていくのが目に見えて分かった。耳も聞こえにくくなっていった。コロナ禍で面会ができなくなったとき、私たち孫の顔を覚えていてもらえなくなつた。でも、一緒に住んでいた私たち三姉妹のことは覚えていてくれていたらしい。

中二の十一月。少しずつコロナが落ち着いてきたとき、ふと「おじいちゃんへ手紙を書きたい」と思った。家の話、学校の話、幼い頃の思い出。書き始めると止まらなくて、気づけば三枚くらいになっていた。妹たちも一緒に書いて、誕生日の日までに病院へ持って行ってもらった。あとで聞いた話だけど、看護師さんが耳元で手紙を読んでもくれたらしい。おじいちゃんはちゃんと反応して、涙を流してくれたそう。その姿を見られなかったけど、届いてよかったとホッとした。

数日後、おじいちゃんの容体が悪化した。回復してく

のを今でも覚えている。授業参観の後、事情を知っている保護者の方が声をかけてくれて、少し気持ちの整理がついた。多分、一人じゃどうにもできていないと思う。

お通夜の日、たくさんの人が参列してくださつた。おじいちゃんって顔が広がつたんだなと実感した。夜は久保川家らしくにぎやかにおじいちゃんと一緒に過ごした。そのとき式中の挨拶を誰がするか決めることになって私が挨拶をすることになった。「おじいちゃんに言いたいことを言える最後のチャンスやん！」って気持ちだった。寝る前、原稿用紙に四枚分、思いを込めて挨拶文を書いた。「ちよっと書きすぎたかな。まあいいよね」って思いながら明日に備えて眠りについていた。

告別式のとき。挨拶をしている途中、言いたいことがどんどん出てきて、前日に考えていた原稿を無視して挨拶をした。泣きそうになつたけど「泣いたら進まない」の気持ちで最後まで話した。後ろを向くと、いとこも、家族も、地域の人もみんな泣いていた。

おじいちゃんが竹で笛を作ってくれたこと。脳トレのおもちゃで一緒に遊んだこと。倉庫に置いてあるストーブでイカ焼きや焼き芋を作つて私が学校から帰ってくるのを待たせてくれたこと。生活の知恵を教えてください。夫夫婦でコントみたいなやりとりをしているのを見るのが私は好きなこと。全部私とおじいちゃんだけの思い出。最後にどうしてもここで二人の思い出を共有したかったから。

れたけど、私は「安心できすぎて、もう逝ってもいい」

って思わせたのかなという気持ちでいっぱいだった。

安心できたのも束の間。一週間くらい経つたある日の深夜。お母さんに起こされた。「学校もあるのに、なんでこんな時間に起こされると？」と思ひながら起きると、予想外のことを言われた。

「じいちゃんが亡くなった。」

とうとうこの日が来た。遺体が家に来るから掃除をしないと、で心がいっぱいになった。亡くなった実感がなく、掃除に一生懸命。

病院に行っていたおばあちゃん、お父さん、叔父・叔母が家に集まってきた。数時間後、おじいちゃんの遺体が運ばれてきた。数年ぶりの再会がこんな形だと覚悟をしていたけど受け入れられなかった。

想像以上に痩せていて、人間らしさがなくなっているように見えた。本当に私のおじいちゃんなのか疑うほどだった。その時、ほんとに亡くなったと実感して涙が止まらなかった。その日は授業参観で学校に行かないといけなかった。ぼーっとしているときに自然と涙が流れた



でも、一つだけ誰にも話していない思い出がある。それは、私にだけ、戦時中の話をしてくれたこと。五歳くらいのおきに聞いた話だけど幼いながら頑張って想像して聞いたことを思い出す。今となっては、その話が分かるようになってきた。

そして、今年是被爆八十年。

私は被爆四世だということをやっと受け止めた。

何回か私は被爆四世だということを聞いてきた気がするけど、本当なのか聞く勇気が持てなかった。「まさか自分が被爆四世だとは思わなかった」から。

じいちゃん！

私、自分のペースで、戦争はしたらだめって伝えていくよ！ じいちゃんが話してくれた戦時中の話も伝えていくけんね！

毎年、命日には仏壇の前で手を合わせている。これからは、その時に近況も伝えようかな。

じいちゃん、告別式のときの挨拶聞こえてた？ 私ね、まだまだ話したいことがいっぱいあるよ。だから、どうか天国でゆっくりしながらいつもの笑顔で聞いていてね。